

# 北朝鮮人道支援の会 ニュースレター NO.53

(朝鮮民主主義人民共和国)

編集・発行人 吉田 康彦

〒330-0855 さいたま市大宮区上小町1145 TEL:048-641-8203 FAX:048-647-6191

E-mail: yy2448@chive.ocn.ne.jp URL: http://www.yoshida-yasuhiko.com/

2008年5月15日

郵便振替番号: 00140-4-126579 加入者名「北朝鮮人道支援の会」

## 9回目の訪朝で確めたこと

4月26日から5月3日まで対外文化連絡協会(対文協)の招待で北朝鮮を訪問してきました。一行は私のほか、中戸祐夫(立命館大学准教授)、大村学(写真家)、岡崎高之(NNA企画局勤務)の計4名で、私としては9回目の訪朝でした。

滞在中は、外務省、軍縮平和研究所、文化省、国家経済委員会、朝鮮赤十字社の幹部、関係者と懇談したほか、世界遺産の高句麗古代壁画、龍崗温泉などを訪問しました。北朝鮮の子どもたちを撮影したいという写真家の大村学氏(体調を崩した田沼武能氏に代わって参加)の希望で、平壤市内と近郊の託児所、幼稚園、小中学校を訪問し、撮影しました。

以下は、滞在中の会談、懇談で直接、確認した事がらです。

(1)米朝関係は着実に進展し、朝鮮半島非核化の「第2段階」は米国が「テロ支援国家」指定解除で終了する。「無能力化」作業はすでに90%完了した。米朝合意に反対するネオコン勢力が一時的に巻き返しているが、ブッシュ大統領のリーダーシップを見守りたい。

(2)膠着状態にある日朝関係を打開するには、まず日本政府が4月に延長した経済制裁を解除し、朝鮮総連弾圧を中止する必要がある。拉致安否不明者の再調査に応じるかどうか、そのあとの問題だ。

(3)超党派国会議員訪朝団は歓迎するが、対話を求めるなら日本側がまず具体的措置をとるべきだ。

(4)李明博新政権は南北の過去の実績を無視しており、発足後、民衆の心は急速に離れている。早晩、路線転換を余儀なくされるだろう。

(5)昨年の水害で食糧事情は悪化。FAO(国連食糧農業機関)の推定では166万トンの穀物不足が生じている。WFP(世界食糧計画)の支援はせいぜい5-6万トンに限られ、北朝鮮当局が不足分をどのように埋めるのかが注目される。(本項のみWFP平壤事務所の見解)

〈吉田 康彦〉

## 写真家の目から見た北朝鮮の子どもと市民

大村 学(写真家)

### 平壤のある小学校にて

「バシャ、バシャ」カメラのシャッター音が教室内に響き渡る。教室の子供たちは、皆、撮影者の方を注視する。そこにあまり笑顔は見られない。写真家は教室の先生に、「普段の授業風景」を撮りたいので、授業を進めてもらおう様お願いをする。教室に先生の声が響き渡ると、子供たちの視線は規則的に黒板とノートを往復する。熱心にノートを取る子供の姿を捉えるべく、机の縁までカメラを近づけるが、カメラの方を見る子供はいない。こちらもシャッ

ターチャンスをしっと待つ、目の前の子供の息遣いがだんだん大きくなり、子供たちの緊張が伝わってくる。たぶん、先生は「カメラを見ないように」と、子供たちに命じたのであろう。表情を変えることなく淡々と授業が進んでゆく。何かのシャッターを切り、授業の様子をカメラに収めると、ほかの教室での撮影をするため、先生にお礼を言う、そして子供たちに会釈すると、子供たちの表情は、自然に戻り、笑顔で見送ってくれる。廊下越しに、先ほどの教室を振り返ると。そこには日本の教室でも見られる子供たちの屈託のない笑顔の世界が広がっていた。廊下を移動しながら窓越しに授業風景を眺めると、こちらに気づいて微笑みかけたり、筆者の持つカメラを興味深そうに見る子供たちも多い、とても自然なことである。



ルンラ小学校の児童たち(大村学撮影)

### どこにもある人間ドラマ

平壤市街では外国人の移動に際して規制があり、自由に単独行動ができるのは、外交官と国連職員、NGOとして入国している欧州委員会のメンバーなどごく一部の人間のみといわれている。それ以外の観光客やジャーナリストなどには、指導員と呼ばれる係員が張り付き、監視下に置かれている。これらの監視・管理行為は、旧ソ連や、東欧など全体主義国家ではよく見られたことだが、近年では、資本主義経済へ移行や、改革開放路線に移行するにつれ、薄まっていった。移動に制限があるのと同様、写真撮影にも規制があり、街中でのスナップショットなどは、注意される。理由としては撮影された人からクレームが来るなどと言うのだが、模範的市民など国家的な宣伝になるもの以外は見せたくないし、記録されたくない、というのが実情のようだ。(筆者のように写真を生業としている人間にとっては、とてもツライことではあるが・・・)

そして、それらのフィルターを通して見た(ニュースなどに登場する)朝鮮の人びとは、時にロボットの様と揶揄されるほど人間味を失っているかのごとく、われわれの眼に映るのである。今回の訪朝で筆者が接した人びとや、街中での市民の様子を見ると、われわれ日本人と変わることのない、人間のドラマを目にすることができる。次回、訪朝の機会があれば、そんな彼らの人間味を伝える写真撮影がしたい、と思う訪朝であった。

## 通信欄

### 会費・義援金・寄付金ありがとうございます。

以下はニューズレター前号(2008年3月1日付)刊行以来、会費・義援金を納入して下さった方々です。(納入/受領日付順・カッコ内は納付・寄託金額)

#### 【年会費2000円プラス寄付金】

田中勝男(3000円)、李 源俊(2000円)、坂石裕司(4000円)、今泉英明(5000円)、中戸祐夫(8000円)、当山喜代(3000円)、鎌田 彰(4000円)、喜多英之(2000円)、金成秀(2000円)、洪 健七(3000円)、温井立央(4000円)、北羅修一(10000円)、児玉武夫(3000円)、前野千鶴(4000円)、横原由紀夫(3000円)、姜 富三(4000円)、酒井紀子(2000円)、西中須盈(1000円)、崔 長吉(3000円)、橋本勝六(2000円)、笠井博之(4000円)、中嶋篤之助(2000円)、金 鎮度(3000円)、田沼武能(3000円)、佐野弘三(4000円)、小林将人(2000円)、東神戸商工会(2000円)、増岡信男(4000円)、大久保敏明(3000円)、松村昌子(4000円)、横田昌三(3000円)、武藤康一(3000円)、中尾哲則(2000円)、多田則明(3000円)、匿名希望(40000円)

累計人道支援基金・運用資金 46, 529円

(2008年5月10日現在)

当会の年会費2000円は「ニューズレター」の購読料金で、会員としての最低限の拠出額です。年間の編集・印刷費用、郵送料、事務経費で、ほぼ相殺されます。2000円に上乗せして送金して下さる額が人道支援の基金です。金額は自由ですが、なるべく多額のご寄付をお願いします。寄付は常時受付けています。

## 会員通信

★ニューヨーク・フィル公演の際、金正日総書記はどこで何をしていたのだろうか。当日の動向を知りたいものだ。「外交はムードだけで進展するわけではない」(本紙前号)としても、米朝関係改善の一里塚としては画期的意味のあるイベントだったはず。芸術好きとして知られる総書記の欠席が悔やまれてならない。(岡崎市在住・大久保敏明)

■ 編集部コメント: 金正日総書記は公式行事やイベントに姿を見せることはむしろ稀です。文化交流といっても米国は敵国であり、一国の最高実力者が出席することは政治的意味合いをともなうことになり、慎重でなければならぬわけですね。おそらく自室でテレビ中継を食い入るように見つめていたに違いないと思います。<吉田>

### 【寄稿】

#### 初めての北朝鮮訪問／初めての海外旅行 岡崎 高之(NNA企画局勤務)

車窓から万寿台の金日成主席の銅像が見えた時、手に汗がにじんできた。私にとって初めての海外体験は、日本で「悪名」高い「北朝鮮」。吉田団長に随行しての公務出張だった。

北京から平壤空港に到着し、平壤市内へ向かう。空港を出て数分はのどかな農村風景が続いた。畑仕事をする姿、老人が小さい子どもの手を引く姿などは日本でも見られる光景だったし、ガイドをしてくれる金英日さんが上手な日本語で話しかけてくれるので、「北朝鮮に来た」という実感はまだ湧かなかった。



しかし木々の隙間から、光る金日成の銅像が目に入った瞬間、大きな緊張感に自分が覆われていくのがわかった。大きなその像に私は視られているような気がした。

私は、生まれて初めて外国人としての自分を認めざるを得なかった。ここでは私は日本人として視られる。無関心だろうが、そうでなかろうが、私は「北朝鮮」を侵略した歴史を持ち、現在、経済制裁をする日本の国民として視られるのだという責任とともに、不安も感じていた。

平壤に滞在して数日後のメーデーの時、公園でバーベキューをしている家族に声をかけると、どうぞと言わんばかりにお酒をつぎ、草餅を勧めてくれた。私たちと肩を組んで歌ったり、踊ったりしながら、「アジアの一員として仲良くやろう」と言われた。おそらく私が感じていた不安はこれだったのだ。当然彼らには、日本の情報ももたらされているはずである。もし日本でこれが逆の立場だった場合、私はそんな言葉を彼らのように言えるのだろうか、むしろ歓迎すらできないんじゃないだろうか。

金さんが日本への入国を拒否された話を笑いながらする。これが今の日本の現状である。私は本当に日本という国が恥づかしくなった。私の初めての海外への旅は「北朝鮮」を視るために来たはずだったが、いつか、自分が「北朝鮮」によって視られ、私は日本を視ることになってしまった気がした。

平壤市内のいたるところに「21世紀の太陽金正日体制万歳！」などのスローガンが書かれた看板がある。労働をすれば住む場所はもちろん、光熱費さえ払わずに生活ができる。私たちが日本人にそんな「北朝鮮」の政治を否定する資格はあるのだろうか。

日本に帰ってきて都心で周りを見渡せば、企業の広告が溢れている。私たちの経済は狂っているといって、この経済を捨てることはできない。それならば相手を認めることで、自分たちにも誇りを持ちたいと思う。

そのために、私が帰国して持ち続けている、「北朝鮮」への後ろめたさ、つまり、メーデーで出会った家族の顔や訪問した託児所の子どもの顔が今でも浮かんでくる。私が、彼らを認めることはできても、その人たちが、自分たちを認めてくれるのだろうかという不安と向き合わなければならない。

私には「北朝鮮」で出会った人たちを否定することは決してできない。しかし、それはまだ日本国民の中の一人の考えに過ぎない。お互いがお互いの国も、国民も認め合い、私自身も後ろめたい気持ちを取り去って「北朝鮮」の人たちと向き会える日を一日も早く実現したいと思うことしきりである。

### 吉田康彦・訪朝報告

2008年5月20日(火)14-16時(聴講無料)

大阪経済法科大学東京麻布台セミナーハウス(TEL 03-3582-2922)